

尖閣調査のパイオニア

～高良鉄夫博士の業績とプロフィール～

編集子

昭和 11 年夏のある日、南洋諸島に一人の生物学徒の姿があった。毒蛇や危険生物から防護するため、膝までゲートルを巻き、背には大きな背のうを担い、肩には胴乱と水筒、手には捕虫網と山刀を持って、立ちほだかる蔓草や木々を打ち払い、熱帯ジャングルの奥地へ懸命に分け入っていた。

鹿児島高農生高良鉄夫氏だった。

何故に、危険極まる南洋群島の探訪踏査を、しかも一人で？

実は高農卒業論文にと、ヤップ、パラオなど南洋群島探険踏査が計画された。

当初は 10 数名の探検隊が計画されていた。ところが、熱帯密林は危険が多いと仲間は 1 人減り、2 人減りして、辞退者が続出、出発直前には一人だけ取り残された。

初心は揺るがず、一人でも行くと決心し、単独調査を敢行した。

予想以上に南洋群島の探訪踏査は厳しかった。

幾度となく命を落とす危険に遭遇したが、持ち前の豪胆さと知略で乗り切った。

酋長の家に泊めてもらったり、原住民に唄と踊りを教わったりした。2 ヶ月後には、大きな調査成果を収めて、無事帰国を果たした。

大とかげと野鶏など生物標本をみやげに持ち帰り、鹿児島市の動物園に寄贈した。学内では、報告会が盛大に催された。

学友たちは南の島の大自然の話に魅了され、探訪を断念したことを後悔した。

それから 10 年後、氏は石垣島や西表島のジャングルにいた。

米軍野戦用の背のうと胴乱、水筒を肩にかけた姿は馬上にあった。

軍隊から復員し、教育界に身を投じていた。

32 才で八重山農林高校校長を拝命し、その傍ら生物資源・富源調査に没頭していた。

沖縄全土が戦禍で未曾有の打撃をうけて食糧は枯渇し、半ば飢餓状態にあった。

食糧の獲保と、生産増強が至上課題であった。熱血漢の青年校長は、石垣・西表の熱帯ジャングルを開発できれば、有数の食糧供給基地に成る筈だと痛感していた。

だが、熱帯マラリアが猖獗し、野猪や猛毒蛇ハブ、有害な動物が潜む危険な地帯であり調査は至難だった。勇猛知略な氏は、愛馬秋月号を駆使して単身ジャングルの奥地に分け入っ



高農時代、屋久島を単身生物探訪、のち南洋探訪に挑戦。(高良鉄夫 1938)

ては、調査探険に励んでいたのだ。

後日、その成果は「八重山開発資料」(1949年刊)としてまとめられた。副題は「農業移民より見た本郡の風土並びに生物資源について」だった。

この本が八重山開発を推進する上で大きく資したのはいうまでもない。

発刊翌年の1950年には、波浪咆哮する絶海の孤島に一人姿を見せていた。

米軍払い下げ軍服を着、水筒と胴乱を腰にしたいつもの出で立ちで、怪石巨岩が屹立する巖頭に立って、天空を乱舞する群鳥と大海原で漁に勤しむ漁船群を望見していた。

名にし負う「海鳥の楽園」「漁業資源の宝庫」ではないか。

古賀の無人島こそ、沖縄の富源であり、一人で調査するには惜しい。

ほどなく、一群の調査団が島に上陸した。

琉球大学高良助教授が植物、海洋、土性専門家らに呼びかけて組織した合同調査団だった。ここに史上初の秘境尖閣の総合学術・富源合同調査がスタートした。

のち、ハブ博士となり、世紀の大発見と言われたイリオモテヤマネコの発見者となる高良博士の研究姿勢は、常に総合実践的かつ学際的視点で貫かれていた。

また、剛毅な氏は、常に先駆的、挑戦的、冒険的であらねばならないとした。

若き日に南洋群島を踏査した感激を体験させたいと思い、計14名(二次と三次調査)の学生を率いて、危険を承知で無人島探険に挑戦させた。

誰もが、尖閣の大自然の玄妙さ、天空に舞う海鳥の壮観さに瞠目し、フィールド調査の醍醐味を満喫した。

完膚無きまで戦災を浴びた沖縄はゼロからの出発だった。

1950年代初頭は誰もが日々の糧を求め、吞まず食わずの苦しい時代だった。



八重山開発に貢献した「八重山開発資料」(1949年10月 八重山農林高校発行)



第二次調査(1952.8)で念願の南小島に上陸、海鳥や植生調査を行なう。(多和田真淳 1952)



第四次調査（アホウドリ調査）（1963.5）北小島でサグロアジサシの群舞の中を進む高良博士ら調査団一行
（「オキナワグラフ」1963年6月号より 森口氏撮影）

苦しい時代にあっても、鋭い炯眼と強靱なパイオニア精神、抜きんでリーダーシップを備えていたからこそ、至難極まる探険調査を将来を見据えて成し遂げることができた。

戦後初の単独調査、合同調査は、実に特筆すべき快挙である。

このように見てくると、「尖閣調査のパイオニア」（戦後）の栄誉は高良博士へ冠すべきである。

その「尖閣調査のパイオニア」は1963年には、琉球政府文化財保護委員会の委託をうけてアホウドリ調査、次いで68年には高岡大輔沖懇委を先導し、資源調査、海鳥調査に励んだ。



アホウドリは居なかったが、高良博士の海鳥の説明に熱心に聞き入りメモをとっている。
右より高良博士、赤嶺、栗国、田積の各氏。（同上）

1969年11月、佐藤・ニクソン会談で「72年沖縄返還」が合意される。一大世替わりの到来である。琉球大学は国立移管という大難題に直面する。

翌 70 年 7 月、高良博士は第 8 代学長に選任された。国立移管の態様、大学の盛衰は高良新学長の双肩にかかっていた。

文部省は駅弁大学・教員養成大学に位置づけ、冷やかだった。

新学長は文部省が提示した 3 学部案を言語道断と一蹴し、激怒した。

日本の南玄関に位置した琉大の役割に対する認識不足、将来ヴィジョンの欠如と論駁した。剛腕の文部官僚をねばり強く説き伏せ、ついに琉大側の 5 学部案、募集定員、教官数等を悉く承服させた。さらに大学移転用地の取得交渉の難題が待ち受けていた。

亜熱帯研究の殿堂として大きな発展を期するには広大な大学用地は不可欠だった。

このため千原新キャンパスは首里キャンパスの 9 倍に及び用地取得を進めていた。

氏は連日、難渋する地主との交渉に奔走した。



学内放送中の高良博士。旧首里キャンパス研究室兼学部長室。(高良鉄夫 1963 年)



琉球大学千原キャンパス（沖縄県西原町在）全景。名実ともに日本の南の玄関口にふさわしく 21 世紀のアジアの架け橋的役割を担う総合大学へと発展している。

(「琉球大学四十年」1990.5 より)

復帰前は琉球大学は8ミリ大学（大宅壮一氏評）と揶揄されていた。その箱庭8ミリ大学が、今日では、熱帯農学・医学・海洋研究諸機関を擁し日本の南の玄関口にふさわしく、アジアの架け橋的役割を担う総合大学へと大きく発展を遂げている。

琉球大学の発展・盛長の礎は、高良博士の尽力と確かなヴィジョンによって盤石に築かれたとも言えよう。

氏は次々と惹起する諸問題、千原キャンパスへの移転、激化する大学紛争の解決等に忙殺される。

かくして尖閣調査は、元学長で盟友池原貞雄博士へ、バトンタッチされる。



大学表札（同上）



キャンパス風景（同上）

以後、琉大グループの調査は池原博士を中心に進展していく。

70年代は、尖閣調査も花盛りとなった。

国連エカフェによる海底石油資源埋蔵の発表で脚光を浴びる。

周知のように琉大グループの調査、九州大・長崎大合同調査、総理府委託の東海大学丸による海底資源調査、沖縄開発庁の資源調査、沖縄県の漁業資源調査等々…

これら多岐に亘る調査が目白押しに実施されていく。

高良博士は、組織的調査を企図し、総合学術調査、合同資源調査に尽力した。

これが効を奏し、今日では、生物相にとどまらず、海洋気象、地質、石油・天然ガス、漁業資源調査など、幅広い領域へ展開し進展している。

このような意味から高良調査団が果たした役割、意義は大きい。

「尖閣調査のパイオニア」高良鉄夫博士は大正2年のお生まれである。

当年95歳になられるが、頭脳明晰、気宇壮大で磊落、矍鑠とされている。



1979年5月沖縄開発庁による学術・資源調査。海上保安庁巡視船、ヘリコプターを駆使して大がかりな学術・利用可能性調査を実施した。学術調査班の面々、前列中央12番が池原貞雄団長。（新納義馬 1979）

20 数年前に脳溢血で倒れて、右半身不随、言語障害を負っていた。
自ら考案創設した「農芸リハビリ療法」で以て、障害を見事、克服された。
今では、歩行に杖をつき、耳が少し遠いの外は、70 代に見紛うほど壮健闊達であられる。
これまで農学、生物学界の重鎮として、学界、教育界、産業界の発展に貢献してこられた。
いただいた名刺を見てびっくりした。



「チョウを翔ばそう会」の設立総会（2001.7）にて。
（「創立 5 周年記念誌 チョウ・人の楽園をめざして 2007.5」より）。

いろいろな団体や研究会のお目付役としてご活躍、今尚、現役でおられる。
毎日が忙しく、目下取り組んでいる原稿執筆もままならないのこと。
実に頼もしく、この上なく嬉しい限りである。
我らの「尖閣調査のパイオニア」高良博士が益々ご壮健あられんことを老後のお手本、カ
ガミとしていつまでもお元気でいて下さい。

この資料集の刊行に際して、ご多忙にもかかわらず監修の労を快く承諾された。
高良博士の絶大な協力と指導の元に、この資料集は誕生した。
この場を借りて厚く感謝を申し上げます。
なお、最後に、高良博士の略歴と主な著書を紹介します。

■略 歴

1913（大正2）年6月25日 沖縄本島本部村備瀬で生まれる
小学2年次に石垣島へ移住
1934（昭和9）年 沖縄県立農林学校卒業
1937（昭和12）年 鹿児島高等農林学校（現鹿児島大学農学部）卒業
1946（昭和21）年 八重山農林学校校長
1950（昭和25）年 琉球農林省農改局研究課長
1951（昭和26）年 琉球大学農学部非常勤講師を経て助教授
1958（昭和33）年 琉球大学教授
1961（昭和36）年 ハブ族の研究業績で農学博士学位取得（九州大学）
同年10月農学部長（昭和45年6月迄3期9年間）
1970（昭和45）年7月 琉球大学第8代学長（昭和48年6月迄）
1979（昭和54）年 退職し、琉球大学名誉教授

■現 在

日本蛇族学術研究所評議員
沖縄熱帯昆虫研究所長
首里城復元期成会顧問
沖縄蔗作研究協会顧問
沖縄県植物防疫協会顧問
日本熱帯農業学会顧問
全国脳卒中友の会連合会顧問
沖縄県脳卒中等リハビリ推進協議会名誉会長等々

■主な著書

「八重山開発資料」1949年 八重山農林高校刊
「琉球の自然と風物」1969年 琉球文教図書刊
「ハブ＝反鼻ヘビ」1970年 琉球文教図書刊
「自然との対話」1977年 琉球新報社刊
「沖縄の秘境を探る」1980年 琉球新報社刊
「馬と語る馬を語る」1988年 那覇出版社刊
「沖縄の資源探訪」1991年 琉球新報社刊
「自然の示唆と人生」2004年 那覇出版社刊

高良鉄夫博士の歩み



鹿児島高等農林学校時代、佐多岬への植物採集旅行にて写す。(高良鉄夫 1934.8)



県立農学校 3 年次 (18 歳)



高等農林では乗馬部に所属 (20 歳)

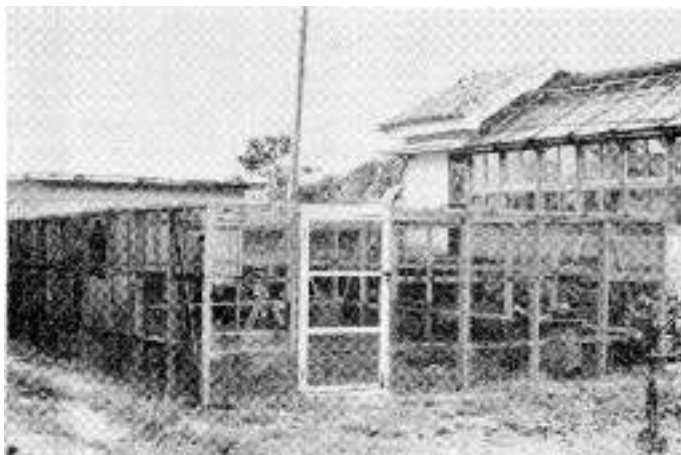


見習い士官 (25 歳)

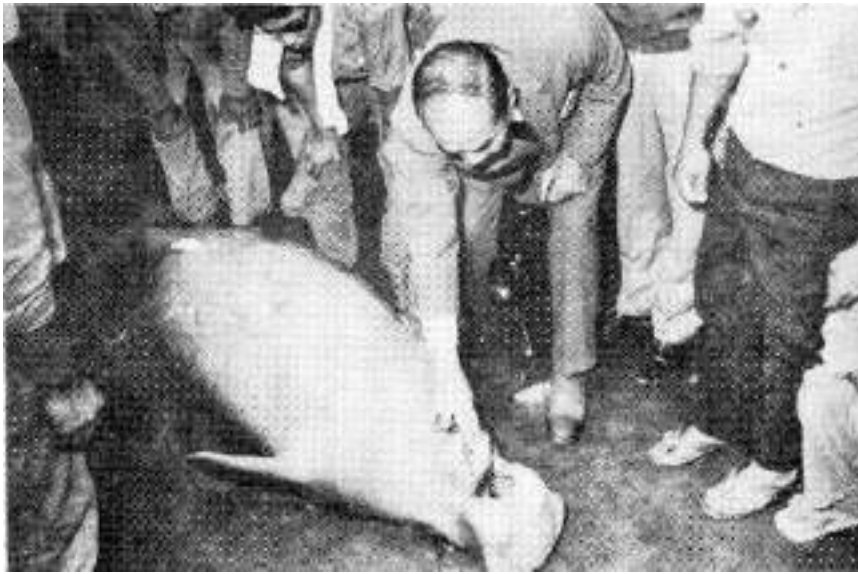


八重山農林高校長時代
(高良鉄夫 1947.3)

クリプトテントウ虫を農薬代用に導入効果試験をしている。
右は、米ミシガン州立大学
カールソン博士。(1955)
(「琉球大学 50 年史写真集」より)



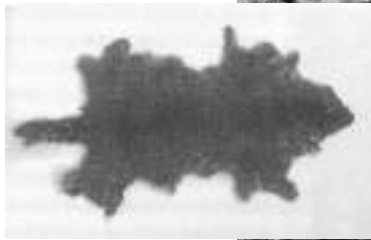
農家のハブ咬傷被害は深刻。
高良博士はハブを根絶すべく
ライフワークに「ハブ研究」に取り
組んだ。左はハブ飼育用小屋。
(高良鉄夫撮影)



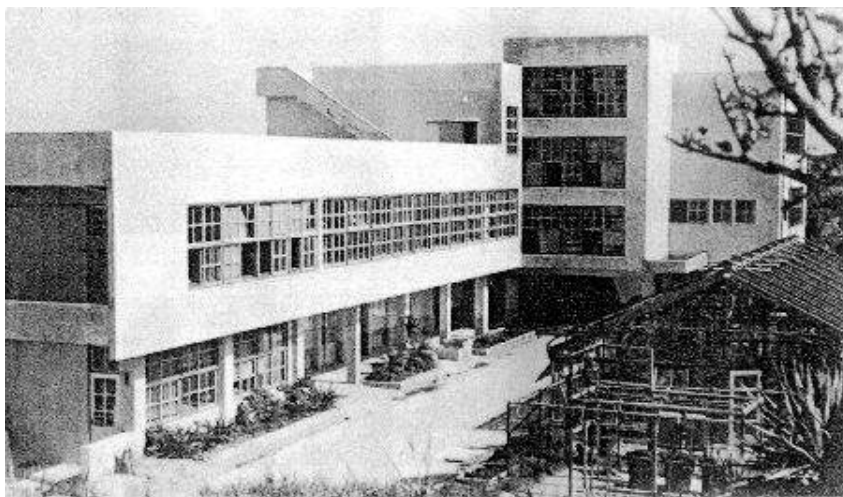
宮古島でとれた
ジュゴンを
調査している。
(高良鉄夫 1965.10)



下:イリオモテヤ
マネコの毛皮。
親富祖善繁氏
が採取した。
この毛皮が新種
の決め手となっ
た。
(同上 1965.2)



「ヤマネコ調査隊」、中央杖姿は高良博士。その右は戸川幸夫氏、左は黒島寛松氏。(同上 1965.6)



琉球大農家政ビル
大学初の恒久建物
(1952年9月竣工)
高良博士の研究室も
ここにあり、第一次
～五次に亘る尖閣調
査の発信源だった。
(「琉球大学 50 年
史写真集」より)



第二次尖閣調査
1952年琉球大学・
琉球政府調査光景。
南小島の古賀村跡
石積みで記念撮影。
(新垣秀雄 1952)

第三次尖閣調査
1953年尖閣列島で
の野外実習調査。
学生11名を引き連
れ渡島した。北小島
では、アジサシが乱
舞し、闖入者へ鋭い
嘴で攻撃してきた。
(岡田潤治 1953)



第五次尖閣調査
1968年尖閣諸島
鉦物資源予備調査。
図南丸で出発前に、
全員揃っての記念
写真の撮影光景。
(兼島清 1968)



採集標本整理に余念
ない(農学部長時代)
(高良鉄夫 1968)

卒業式で祝辞を
述べる高良学長。
(同上 1973.3)



琉大農学科 1971 年度
卒業記念写真。(同上 1971.3)3





ノグチゲラ保護のため
ランパート米高等弁
務官に北部山地での
演習自粛を申し入れ
る(高良鉄夫 1969.4)



沖縄海洋博研究会長
として海洋博工事に
よる自然破壊を憂慮
し屋良知事に進言。
(同上 1972.1)



教育研究功勞に対し
勲二等瑞宝章を授与
された。叙勲祝賀パ
ーティーで祝いの花
束を受け取る高良博
士。(同上 1984)



オオゴマダラの
産卵状況に見入る。
(編纂会 2006.1)

日本爬虫両棲類学会
第46回大会（琉球大
学にて）、ハブについ
て特別記念講演を行
う。（同上 2007.11）



「首里城に蝶を
飛ばす会」の勉強
会でオオゴマダ
ラの生態を講義
している。
(同上 2009.6)



脳卒中リハビリ訓練施設で、園芸リハビリを指導している。
(編纂会 2007.6)

自然に親しませようと
子供たちに
草花の育て方を
実地教育している
(同上 2007.6)



子供たちには
昆虫博士で人気者。
「首里城に蝶を飛ばす会」の集まり、
一同揃って
記念写真をパチリ。
(同上 2008.1)



53.4年ぶりに、第二次、三次調査で引き連れていった教え子12名が打ち揃い、高良博士を囲んで思い出話・座談会に興じた。
(編纂会 2006.2)

「君たちは歳をとったが顔形は昔のままだ。情熱もファイトも消えてない」と嬉しいお言葉を頂戴。先生を囲んだ記念の写真を一枚バチリ。
(同上 2006.2)



第四次調査、五次調査の参加メンバーとも座談会を行った。少人数ながらも貴重な話も飛び出した。座談会の内容は「尖閣研究 高良学術調査団資料集」に収録された。
(同上 2005.11)



「尖閣研究 高良学術調査団資料集」の発刊祝いと「高良鉄夫先生への感謝の集い」が催された。その席上、尖閣諸島調査に参加した一同から感謝状と記念品が贈られた。
(編纂会 2009.11)



高良学術調査団(第一次～五次)の参加者一堂に揃い撮った記念写真。(同上 2009.11)



高良鉄夫博士 カチマヤー祝い（97歳の祝い）。老いても頭脳明晰、矍鑠とされている。
(編纂会 2009.8)

愛用のサインスタンプ

※「尖閣研究 高良学術調査団資料集上」（2009年刊）より転載しました。
後半部は、「高良鉄夫博士の歩み」と題し、写真の一部を追補しています。

追記：2014年（平成26年）5月17日

高良鉄夫博士は、100歳で天寿を全うされました。